

アカリちゃんはレベルドレインを覚えた！

sakae999999999

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「プリンセスコネクト! Re:Dive」の小悪魔エンジェル美少女アカリちゃんのお話です!

今回のイベントで魔族からエンジェルになったりで大活躍なアカリちゃん可愛いよアカリちゃん。

年下だけど、もし、ヒロインと結ばれた後のお話があるとしたら、おそらくエッチのテクニクはかなり上位まで成長するんじゃないかと思ったり。

(エリコさんとかペコさんもヤバそう。シズルお姉ちゃんに至っては最初からえっちの勉強してきてどんなテクでも実践しそうなくらいにヤバそう。)

で、フルダイブゲームでレベルドレインさせたらっってお話を書いてみました!

五感が使えるフルダイブゲームでレベルドレインって最強なんでは?と個人的には思ったり。

## 目次

アカリちゃんはレベルドレインを覚えた！	1
天使と悪魔のアカリちゃんとのえっちな特訓！	10
ハロウィンカオリのぱいずり特訓！	22

アカリちゃんはレベルドレインを覚えた！

「お兄ちゃんーん！」

「？」

振り向くと、アカリが手を振りながらこちらへと駆けていた。綿あめのような真っ白でふわふわした少しくせのある髪がゆれ、あどけない表情や小柄さは子どもらしさを感じさせる。

が、彼女は一言に子どもらしいとは言えない。

一歩一歩走るごとにたゆたゆと揺れる、発育の良い胸。

雪のように真っ白で、思わず触れたくなくなってしまふ肌。

それだけでも欲情を駆り立てるのに、殊更それを助長するのが、誘惑してくるかのように挑発的な服装。

セパレートになっていているそれは、胸とお尻を隠すためだけのもの。華奢な肩や腰回り、おへそもみせつけられてしまう。

メイド服のようなふりふりのフリルスカートからはすらりとした足が伸び、

それをスカートの中からガーターベルトとニーハイソックスが包んでいる。

加えて、魔族であるアカリは羽や角、しっぽも生えており、その姿はさながら小悪魔のようであった。

「こんにちはーお兄ちゃんー！」

笑顔で、アカリ。

「こんにちは。」

ユウキがそれに応える。

ユウキは、アカリの事がよくわからないでいた。

初めて出会ったとき。

不可抗力とはいえ、お尻を触ってしまったこと。

そして、これもまた不可抗力とはいえ、下着を拾ったこと。

それを彼女は全く怒っていない。

それがとても不思議で、他の女の子とは色々と違う不思議な子、という印象だった。



むぎゆんつとこちらを押し返してくる。

どくんつ…!どくんつ…!どくんつ…!

と、身体が早鐘のように脈打つ。

やがて気づいた頃には、ユウキは地面に押し倒されていた。

「ぷは…っ…♪」

ずっと触れていた唇が離れる。

「どうですか?お兄ちゃん♪」

「どう…?」

顔を赤らめ、ユウキは言葉に詰まってしまう。

「これが私の新しい技ですっ♪レベルドレインっていうんです♪」

「そ、そうなんだ…」

どきどきしながら、アカリを見上げる。

彼女は馬乗りになりながら、ユウキを見下ろしている。

童顔で可愛い笑顔。

しかし、ユウキはその笑顔を見て、どこか不思議な気持ちになっていた。

人の笑顔を見るのは嬉しい。

笑顔はともきらきらしていて、

楽しい気持ちになって、心があったかくなるから。

だけど、アカリの笑顔は…

「いつもリードしてくれますよね、コーチ♪」

でもでも、今日は、反対ですよ♪

アカリの技を破ってみてくださいね♪」

彼女の顔が、身体が、再び降りてくる。

「あっ…あっ……んんんんんん!!!」

「んん…♪」

そして口をふさがれる。

どくんつ…どくんつ…どくんつ…

今までに感じたことのない何か、ユウキの中を駆け巡った。

抵抗しようと、レベルドレインを防ごうとしても、ユウキの身体には力が入らず、

何もできない。

しかしそもそも、ユウキはもはや抵抗の意思はなかった。なぜなら、とても、気持ちよかったからだ。

「えへへ…♪お兄ちゃん。アカリの新しい技、どうですか？

え？ダメージがない？ですか？

ふふっ♪たしかにそうですね♪

でもね、お兄ちゃん。

HPも大切ですけど、もっと他のところを見たほうがいいですよ♪」

言われて、夢見心地のふわふわした意識の中で自分のステータスを確認する。

すると、なにか違和感があった。

「あ、あれ…？」

「それじゃ休憩はおしまいですよ、お兄ちゃん♪

かくご〜♪」

再度、柔らかな肢体がユウキにおそいかかる。

そして、ユウキはその違和感が確かなものであると気づいてしま

う。

全力でもがくユウキ。

しかし、自身で思っているような力は全くと言っていい程に発揮さ

れていなかった。

それでもあきらめず、もがく。あがく。あらがう。

「ぶはっ…もう、お兄ちゃんつてば激しいよお♪

でも、まけませんよ？」

全力で頭を振り、キスから逃れる。

(とは言うもののやはり何故か身体にほとんど力が入らない。)

アカリは身体を密着させたまま離れることなく、耳元でささやく。

「お兄ちゃん、レベルが減っちゃってるって気づいたんですね♪

そうですね♪レベルドレインっていうのは、相手からレベルを奪い取る技なんですよ♪

ただ、相手に触れることで可能になるって説明だったので…

こんなことお兄ちゃん以外に頼めなかつたんです♪」

てへり、と笑顔でアカリ。

可愛らしい純真無垢な笑顔。

しかし、奪われているのは紛れもなく大切なレベル。

ペコリーヌやキヤル、コツコロと冒険し、ユイやレイ、ヒヨリたちと強敵を倒した証。

決して奪われてはいけないもの。

それなのに。

「ん〜…♪」

「んう…んうっ…んつつう…い…」

気持ちよくなつて、たいした抵抗もできないまま、キスを受け入れてしまう。

そんな情けない自分自身に思わず涙してしまう。

と、それに気づいたアカリが情けをかける。

「お兄ちゃん。男の子が涙なんてだめですよ♪」

そう言つて、アカリはぺろり、と涙を舐め取ってしまう。

「!?わあ♪すごい♪」

レベルが、奪われてしまう。

「そっかあ。身体に触れていればレベルドレインできるみたいだけど、

お兄ちゃんそのものを食べちゃうとすっごく効果が上がるみたい

♪」

「っ…い…」

ユウキは涙を抑え、そっぽを向く。

「ふふっ♪お兄ちゃん、私の技を本気で相手してくれる気になったんだね♪

うれしいっ♪」

ちゅっ♪

と頬にキスをされてしまう。

しかし、それではあまりレベルは下がらない。



直接口にキスをされたり、涙を舐め取られたりしない限りはそこま  
で効率の良い技ではないようだった。

「えへへ…♪お兄ちゃん、ここ、気づいてないと思ってた？」  
つんつん、と、ユウキの股間に触れられてしまう。

そこは、もう、長時間のアカリのキスでとろとろにとろけてしまっ  
ていた。

「お兄ちゃんのえっち…♪」

言いながら、アカリはユウキのそれを外に露出させてしまう。

「あつ…ああつ…！」

髪をかきあげつつ、アカリの顔がそれに近づいていく。

ゆっくり。

とちろり、とこちらを向く。

ユウキは動けないでいた。

抵抗したい、でも。

それを見て満足げな表情を浮かべ、アカリは髪をかきあげつつ、そ  
れに口を触れさせた。

「ちゅっ……………♪」

「つう……………!!」

軽く、アカリの唇がユウキのおちんちんに触れる。

そして、少し舐め取る。それだけで、ユウキのレベルが下がってし  
まう。

「ちゅう、ちゅっ、ちゅぱっ……………ちゅう…」

「ひうっ…!?あつ…！」

どつくんっ！どつくんっ！とユウキのおちんちんが脈動する。

そのたびに、レベルが下がってしまう。

「ひう!?あう!?あうううっう!!」

おちんちんに絶え間なく降り注ぐ快樂の雨。

アカリの唇がユウキのすべてを奪っていく。

それに恐怖し、ユウキがまだ浅いアカリの侵食を抑えようと、腰を  
左右に揺らす。

なんとか、アカリのお口からおちんちんが抜けるようにと。

しかし、アカリはこちらをちらりと見てから、ふわりと笑う。

それはとても愛くるしい笑顔だった。純真で汚れを知らない笑顔。おちんちんを加えてさえいなければ、そう見えただろうと思える。

「!!」

アカリは腰の後ろに手を回してしまう。

先程キスから逃れようとした時、それを逃すまいとしたときのように。

そのあと、キスはより激しくなってしまう、ユウキは逃げ場も何もかもを失ってしまった。

「や…やめ…!!」

「ちゅっ…ちゅるる…ちゅるる…んっ…♪」

おちんちんをアカリのお口が滑っていく。

ふかく、ふかく、お口でくわえ込むために。

「あっ…あっ…ちゅめっ…」

一瞬、ちらりとこちらに目をやったあと、アカリは目を瞑る。

すべての感覚を、おちんちんを啜えるお口に、這わせている舌に集中するために。

「ちゅるっ、」

「あっ」

「ちゅるるるっ、」

「あっあっ」

「ちゅるるるるっ」

「っうっ!!」

「ちゅるるるちゅるるちゅりゅちゅりゅちゅりゅちゅるるちゅりゅちゅるるちゅりゅちゅるるるる!!!」

「ん!あっっ、あっあああああああああ!!!??」

アカリのお口がユウキのおちんちんに全力で!!おそいかかる。

たまらない快樂の渦に自身の意志とは無関係に反射的に暴れるユウキ。

しかしレベルが下がったユウキに対して、逆にレベルが上がったアカリの前では大した抵抗もできず、更には腰に手を回されて逃れるこ

ともできないデープ・スロートフェラを味わわされてしまう。

ユウキができたことは、ただ自身のステータスを眺めることだけだった。

100をゆうに超えていたレベルが1になるまで。

ユウキは悲しみに暮れた。しかし涙することはなかった。

それを超えて余りある快樂と悅樂を与えるアカリのレベルドレインフェラのせいだ。

年下のフェラテクであまりにもあつけなくイカされる。

記憶を失っているユウキの純真なおちんちは奪われ、搾られ、陵辱されてしまう。

でもそれを辛いことだと思いたいのには、

そう思えないまま、ユウキはただただアカリのフェラに翻弄されてしまう。

気を失う、ことはなかった。

アカリがそのたびに優しいフェラに切り替えてしまうからだ。

抵抗することもできなかった。

アカリがそのたびに激しいフェラに切り替えられてしまうからだ。レベルを奪いとるアカリ。

そして同時に、えっちの技巧も激しく上達していく。

決して逃れることはできない小悪魔フェラの前に、ユウキは為す術もない。

激しすぎる快樂の絶頂を味わわされ、自分の意志を介さない気絶と言う名のせめてもの抵抗を試みる。

が、快樂はコントロールされ気絶ギリギリで抑えられてしまう。

気絶までしようと思つた無防備おちんちんを、労るような優しいご褒美フェラが包み込む。

抵抗の意志がないおちんちんではアカリの優しすぎるフェラに負けてしまう。

なんとか快樂に流されないよう踏みとどまろうと思える程には回復しそうなユウキの意思を感じ取つた瞬間には、アカリのフェラは激しさを増してしまう。

快楽に耐えて正気を保つことは許されず、快楽に屈服して気絶することにも許されない。

『気持ちいい』を感じさせられたまま、快楽の閾値から絶頂の限界値までをくるくるともてあそばれる。

「あつ！あつ！あああつ!?……………あふつ……………う……………くうう……………つ!!?  
あああつ!!!あひゅ!?んあああつ……………あつ……………あつ……………あつ……………あつ……………あつ……………」

「ふふっ♪」

あどけなさが残る愛らしい笑顔。

レベルを奪っているという邪気も妖艶さも感じさせない明るい笑顔。

その道のプロですら到達し得ない超絶技巧を駆使して、アカリはユウキのレベルの全てをうばってしまうのだった。

天使と悪魔のアカリちゃんとのえっちな特訓！

「あ！お兄ちゃん！こんにちは♪」

「こんにちは。よかった。探してた。」

騎士くんはアカリちゃんにお願いごとがあった。

「ええ!?アカリを探してくれてたんですかあ!?

えへへっ♪嬉しいな♪」

可愛らしい笑顔が弾ける。

その姿を見て、騎士くんの心がどくんつ、と脈打ってしまう。

…それではいけない。

「特訓ですか？

あ、この前はその…ごめんなさい。」

この前。

それはアカリちゃんのたわわに実った魅惑の果実に成す術なくレベルを全て吸い取られてしまった特訓のことだった。

奪い取ったレベルは、いつものプリンセスナイトの強化とは逆の要領で、アカリが騎士くんに魔力でレベルを流し込むことによりもとに戻すことができた。

しかし、敗北してしまった騎士くんは、レベルドレインに対抗する力を手に入れるため、

強くなるために彼女との特訓を申し出たのだった。

「はいっ♪もちろん大丈夫です♪お兄ちゃんのお願いは最優先ですっ

♪

ちよっぴり待ってくださいね♪」

目を瞑り、アカリが話し始める。

「あ、お姉ちゃん？アカリ、ちよっぴり用事ができちゃったので帰り遅くなるからね♪」

『えっ、ちよつとアカリ!?今日の夕食当番ー』

「おねがい♪お姉ちゃんに代わりにやってほしいなあ♪」

『えっ、そ、そんないま言われたって…!?!』

「おねがいっ♪お姉ちゃん♪」

『あ、う…しよ、しようがない…わね…』

「やったー♪ありがとうお姉ちゃん♪だーいすき♪」

『／／…な、なにいつてんの！もう…。』

念話が途切れる。アカリちゃんの魅力にはお姉ちゃんのヨリも敵わないようだった。

「はい。念話でお姉ちゃんに連絡したので大丈夫です♪じゃあ、公園にでも行きましょうか♪」

暗がりの公園にたどり着く。

もともと人気の多い公園ではないのだが、夜も程近く、辺りには人がいないようだった。

「お兄ちゃん、実は私、あの後、更に新しい技を身に着けたんです。

でも…その…あんなことをしちやった後だったから、言い出せなくって…」

その…お兄ちゃんさえ良ければ、私の新しい技を受けてもらえませんか…?」

「い…よ。」

願ってもないことだった。

アカリの魔法、レベルドレインに為す術なく破れた騎士くんは、それを克服するためにこの特訓を申し出たのだった。

これから、レベルドレインを覚えた敵と戦うことがないとは言えないのだから。

「えっ、本気でやってもいい、ですか？」

やったー♪ありがとう！お兄ちゃん♪」

むぎゅんっ♪と弾んだおっぱいが騎士くんの腕に押し付けられる。

たえなくちゃ！と騎士くんは頑張った。

たたっ、とアカリが騎士くんの目の前に立つ。

「今度の技は、エンジェル化…なんですけど…えいつ♪」  
言うど、アカリが2人になる。

しかし、服装が違っていた。

一人はいつもどおりのアカリだ。まだあどけなさが残る少女なのに、年齢の割に発育の良い身体つきと、妖艶な色気が混ざった男を惑わすのに十分な魅力を放つ小悪魔。

そして、もう一人はいつもと似ても似つかない、天使の服装のアカリだった。白を基調とした清楚な雰囲気を感じながらも、その服装は男を虜にする魅力に溢れている。

「天使と悪魔のアカリの力なら、

これまで以上にお兄ちゃんの戦いのお役に立てるかなって♪

だから、この力をうまく使えるようになりたいんです！コーチ！」  
天使と悪魔のアカリが懇願してくる。

2倍の上目遣いの可愛らしさに騎士くんはすでにドキドキし始めていた。

が、ふるふると頭をふり、何とか堪える。

「僕も頑張るー！」

「ありがとうございます！コーチ！」

そうして、アカリたちと騎士くんの特訓が始まった。

「じゃあ、特訓しよっか♪」

「うん。」

頷く。

「それじゃあ、お兄ちゃん。ここに座って？」

ぽんぽん、と天使と悪魔のアカリが公園の木のベンチを優しく叩く。

「うん。」

アカリに言われるがまま、座る騎士くん。

「ふふっ。となり失礼しますね？」

言って、小悪魔のアカリが左隣に。

「じゃあこっちも♪」

言って、天使のアカリが右隣に。

「／／／」

赤面してしまう。

「では、天使のアカリはお兄ちゃんの左腕に抱きついちゃいますね♪」  
「それじゃあ、悪魔のアカリがお兄ちゃんの右腕にまわりついちゃいます♪」

2人のアカリが騎士くんの両隣に座り、腕に抱きつく。

白と黒の服からぎゅむぎゅむと押し付けられる、発展途上の瑞々しい肉の果実が騎士くんの両腕を包み込んだ。

「それじゃあ、始めちゃいますね?」

悪魔のアカリが、騎士くんのズボンからおちんちんを取り出す。

「あ、アカリちゃん!?!」

「大丈夫ですよ。お兄ちゃん♪」

もう夕方だし、この公園、ランドソルの郊外にあるからそんなに人は来ませんから♪」

「そ、それはそう、だけど…」

「それに、不可視化の魔法を使ってるんで、大丈夫です♪安心してください♪  
さい♪」

あ、でもでも。声には注意してくださいね?音までは防げないの  
で。」

天使のアカリが、優しく囁く。

「えへへっ♪ちっちゃくて、やわらかくってかわいい♪」

よろしくね、おにいちゃんのおちんちんさん♪

まだちよっぴり心配してるのかな?人に見られたらどうしよう  
〜って♪

えへへ、大丈夫大丈夫♪すぐに安心させてあげるからね♪」

言って、悪魔のアカリの手が、おちんちに絡みつく。

そして、にぎにぎと、おちんちんの具合を調べていく。

「ふふっ♪お兄ちゃんのすごーい♪前はもつとすぐにおつきくなっ  
ちやたのに♪」

アカリにレベルドレインされないようにがまんしてるんだね♪」

悪魔のアカリが、耳元で囁く。

「でもね?」

しゅっ、しゅっ、しゅるり♪



とおちんちんを悪魔のアカリが優しく扱っていく。

「くっ…あつ…い…」

刷り込まれていく快樂におちんちんはひくひくと脈打ちながら、みるみる大きくなってしまふ。

「お兄ちゃん弱点…♪この前覚えちゃった♪」

さつきぼの傘みたいになつてゐる亀さんと、竿つていう長いところの間だよね♪」

騎士くんの雁首を重点的に責めあげる。

「あつ…あつ…ああつ…い…」

「それにい、ここ♪亀さんをなでなで♪つてしながらあ、

雁首つてところをしゅっしゅっ♪」

「ああつ…あひつ…んくう…!!」

「最後にい、竿の部分をお、ごしごし♪ごしごしつてしてあげればあー…」

「だめだよ？そうはさせないんだから♪」

悪魔のアカリが射精させる止めに竿を握り込もうとした瞬間、

天使のアカリの手が、竿を包み込んだ。

「お兄ちゃん♪私は味方だからね？頑張つて悪魔のアカリと一緒に勝とうね♪」

天使のアカリの手のおかげで、竿への強力な刺激は避けることができました。

「ふふっ♪じゃあ、もっつとさきの方を…えいっ♪」

悪魔のアカリは竿を締め、先端に責めを集中する。

雁首、尿道口、それらをくりくりと指で擦り上げる。

かと思えば、手のひらで撫であげながら、

指輪つかを雁首にあてがい、縦に動かしたり、回転を加えたりする。

「お兄ちゃん♪だめだよお？とつても気持ちいい顔になつちやつてるよ♪」

お顔がとろけちやつてる♪とっても可愛いけどお、今はダメ♪

悪魔のアカリに負けないで？お手々におちんちん負けないで？」

「お兄ちゃん♪ツライよね？おちんちんの先、亀さんだけじゃ、イケな

いよね？

悪魔のアカリじやイカせてあげることできないの♪

だからあ、一回♪

一回だけ、スツキリしてみない？

そしたら、ぽーつとしちやってる頭がしやきつとしてえ、きつと立て直せるよ？

ね？だからあ、天使のアカリにお願いしちやお？

『竿をしごいて』って♪」

「だめだめ♪お兄ちゃん。そんなこと言ってえ、

悪魔のアカリはそのままえつちに責め続けるつもりだよお？

おちんちんからレベルドレインされちゃうよ？」

「大丈夫だよね？

レベルドレインはお兄ちゃんの精液にレベルを溶け込ませて、

飲み込んでから奪うんだもん♪

お手々じやどうやっても奪えないよね？

ね、お兄ちゃん？お願い、しちやおうよ♪」

「あつ…あう…あ、アカリ…お願い…気持ちよく…なりたい…っ！」

騎士くんは、たった一度だけのつもりで、折れてしまう。

「…そつかあ…しようがないよね？じやあ、天使のアカリが気持ちよくしてあげる♪

確かに、お手々でびゅーってしちゃうだけならレベルも奪われないもんね♪」

「はう…っ♪」

言つて、天使のアカリが天国の快樂をお手々でおちんちんにこすりつける。

程なくして、精液を溜め込んだおちんちんに限界が来る。

「あつ…あつ…あああああ♪」

びゆるびゆるく♪と、快樂がおちんちんから弾ける。

あまりの気持ちよさで、騎士くんは脳がまっしろになりそうだった。

「あえ？…あつ…ああう…ああつ!？」

射精しているにもかかわらず、天使のアカリの指は止まらない。それに困惑していると、くすくすとアカリの笑い声が聞こえた。天使と悪魔、両方のアカリの笑い声だ。

「ね、お兄ちゃん♪」

頭ふわふわくっついてしてるから気づいてないと思うけど、

おちんちんのすぐ先を見てみて♪」

悪魔のアカリが囁く。

ぼうっつとした頭で、おちんちんの先、射精した精液が飛び散ってしまったであろう部分を見やる。が、そこには一滴たりとも精液は垂れてはいなかった。

代わりにあったのは、ふりふりと喜んでいるかのように踊っている大口を開いた悪魔のアカリのしっぽだった。

騎士くんはおちんちんの快楽で理解できていなかったが、

精液は悪魔のアカリのしっぽおまんこに飲み込まれていたのだっ  
た。

「あれあれ〜？ごめんね、お兄ちゃん。おちんちん一回スッキリさせてあげるつもりだったのに、まだ固いみたい…♪」

もうちよつとだけ、続けるね？ふふっ♪」

「ま、まってー」

「それっ♪」

と、天使のアカリ。

「ああああああああああああああああっ!!!」

天使のアカリがごしゅつごしゅつ、と激しい手コキを始める。

が、そこから飛び散った精液の方向には、

常にホーミングされた悪魔のアカリのしっぽが口をひらいて待ち構えていた。

ーその後、アカリとの特訓は続いた。

「お兄ちゃん♪むぎゅつむぎゅつ♪たっぱんたっぱん♪きもちいいね？

いつでもいいんだよ？気持ちよくなる？」

「だめだよ、お兄ちゃん。悪魔のアカリの言葉をきいちゃだめ♪  
おっぱいで精液をだしてえ、お口からレベルを吸い取られちゃうよ。」

天使のアカリとがまんしよ？」

言いながら、体勢は先と異なる。

天使のアカリがベンチに座り、その股の間に騎士くんが座っている。

天使のアカリは口では味方を装いつつ、

さわさわと騎士くんの乳首あたりを焦らすように撫で回していた。

その騎士くんの股の間、ガチガチに固くされてしまったおちんちんを、

悪魔のアカリがやわらかなおっぱいで挟み込んでいた。

「ねえ、お兄ちゃん♪」

天使のアカリの言うことを聞いてると、ずっと気持ちよくなれないよ？

がんばりやさんなのはとっても素敵だけどお、我慢しすぎるの良くないと思うなあ♪

あつ、ぴよこぴよこーってしちゃいましたね、お兄ちゃん♪

悪魔のアカリのおっぱい気持ちいいですか？」

「ふふっ♪お兄ちゃん、感じはじめてるの？」

そのまま気持ちよくなっちゃだめだよ？

悪魔のアカリに耳を傾けちゃだーめっ♪

むぎゅむぎゅーっておちんちんせめてるおっぱいを意識しないで？

背中の天使のアカリの柔らかかおっぱいも感じちゃだめだよ？」

「はう…あう…っ！」

おちんちんをひくんひくんと震えさせながらも、必死で快楽を堪える騎士くん。

「すーい♪おにいちゃんのおちんちん、

アカリのおっぱいでいっちゃったこの前とはぜんぜん違う♪



「んっ♪ちゅうううううう♪」

「あっあっあっあああああっあっんあっああああっ」

射精寸前のおちんちんはぱくんとくわえこまれ、精液をのみ込まれ、

レベルドレインされてしまう。

しかし少しだけがおっぱいへと垂らされる。

胸に落ちた精液ローションは、さらなるすべりと快感をおちんちんへと与えてしまう。

何度も射精し、何度でも吸い取られる。

悪魔のアカリのテクは凄まじく、

最高の快楽を味わわせることに特化され、磨き上げられていた。

わざとレベル1が吸い取れるはずの精液をローション代わりに使う。

一見非効率だが、1レベルを犠牲に、10レベル分の精液が程なく吐精させてしまう。

アカリちゃんに愛されている騎士くんであるがゆえに、最高の快楽を与えられてしまう。

与えられた快楽が次の快楽の呼び水となり、その快楽がさらなる快楽を生む。

雪だるま式に膨らんでいく快楽。最初に射精させられてしまった時点で、

騎士くんの運命は決定づけられていた。

アカリちゃんのレベルドレインの餌食となった騎士くんは、レベルをすべて奪われるのはもちろんのこと、完全に意識を失う——

「はむっ♪ちゅうちゅうちゅううううう♪」

「んあっううううあああああああああっあああああああ  
あ」

「お兄ちゃんごめんね？アカリ、お兄ちゃんのがとつても美味しくてがまんできないよお♪」

「ふああっあっあっ、らめっ、あう、と、とめへっ…はああっ…やあうあっ!？」

「……ことすら許されず、脳で感じる許容量を遥かにこえた快楽を延々と与えられ続けるのだった。」

「むむっ!?!」

「ん?どしたんだい?シズルちゃん?」

そこにいたのは純白の美しい白騎士と、

そのギルドマスターである赤の最強能力者だった。

「なんだか、弟くんの声が聞こえた気が……」

「え、ほんとに?気づかなかったなあ?」

「こんな暗がりの、それもこんな人気のない公園に彼が来るかな?」

「そ、それも、そう……だよな?うーんでも……」

「なんだか不思議なことが起こってる気がするんだけどなあ……」

「前も、日課の弟くんレベルチェックしてたら……」

「え、そんなのいつもやってるの?」

苦笑しながら、赤の能力者、ラビリスタが返す。

「お姉ちゃんだから、当然じゃないですか?」

「一部の疑念もなく返すシズル。」

「そ、そっか。さすがお姉ちゃん。」

「前に、弟くんのレベルが1まで戻ってたんです。すぐに元の数値に戻ったので、

多分バグかなって思ってたんだけど……」

「そう言えば今日はどれくらいレベル変わってるのかなー♪」

「弟くんの日々の成長を喜びとともに確認しようとするシズル。」

「あ、あー。シズルちゃん?私もなんだか彼の声が聞こえた気がしてきましたか?」

「ステータス確認よりも、彼がいないか探したほうがいいんじゃないかな?」

「ただ、私のプリンセスナイトの知覚能力は割と広くてね。」

「ありえるとしたら、ランドソルの中央街の方じゃないかなあ……」

「え、本当ですか?マスター!?!うー私が近くにいるのに感じ取れない

なんてえ…

それもなんだか…狂おしいくらい甘くて可愛らしい声をあげてたような気がするんです。

待っててねー！弟くんっ！今すぐ探し出してあげるからねー！」

ばびゅーん、と飛んでいくシズル。

「…近い、かなあ？十キロはあるんだけどね…。ここから。」

まあ、そんなことより。」

こほん、と一呼吸入れてそちらの方につぶやく。遠くて聞こえるはずもないのだが。

「誰を選んで幸せになるのも自由だよ。」

この世界、存分に楽しんでほしいな。ま、いろんな形でも、さ。」

見えないはずのもの、足音が聞こえてきたからであろうが、快樂に身を振りながら声を上げ用とする彼と、必死に彼の口を抑える天使な少女と、その股の下にいる悪魔の彼女、に遠目を向けながら、オブリジェクト変更能力者であるラビリスタは呟いた。

…続く？



ハロウィンカオリのぱいずり特訓!

ハロウィンの日。

喧騒がしいランドソルを、とぼとぼと、騎士くんは歩いていた。と元気な声とともに、視界がいきなり真つ暗になる。

「トリックオアトリートさく♪おかしくれなきやいたずらするよく？」

むにゆり♪

とやわらかな感触が騎士くんの背中に押し付けられる。

独特のイントネーションは、明らかにカオリのものだった。

「…ごめん。お菓子は持ってない…」

対象的に暗い声で騎士くんは呟いた。

「んー?どうしたの?今日はお祭りさく♪」

そんなに沈んでたらダメだよ?なにか悩みがあるのー?」

むにゆむにゆと優しく押し付けられるそれに、騎士くんは感じ始めていた。

それが、彼の悩みだった。

『お兄ちゃん♪むぎゆつむぎゆつ♪たつぱんたつぱん♪きもちいいね?』

いつでもいっていいんだよ?気持ちよくなる?』

『えへへっ♪アカリのおっぱいで、おにいちゃんのおちんちんもつといじめてあげるね♪』

『お兄ちゃんごめんね?アカリ、お兄ちゃんのがとっても美味しくてがまんできないよお♪』

『お兄ちゃん♪誰か来るから声出しちゃダメだよ?パイズリはやめてあげないけどね♪』

「……………っっ!!!」

アカリの声が、フラッシュバックする。

天使のアカリに口を押さえつけられながら、声もあげられないままのパイズリせつくす。

アカリのテクニクは以前とは比べ物にならなかった。

そして、気を失うギリギリで快楽をコントロールされながらレベルが1になるまでおちんちんをあかりのおっぱいにすりおろされてしまった。

以来、おっぱいを見るだけで、おちんちんがひくひくと反応してしまふようになっていた。

そして、カオリのような大きくてぷるるんっ♪と新鮮でジューシーな果実のような瑞々しいやわらかおっぱいを押し付けられてしまつては――

「……い？お……い？聞いてるさー？」

ハロウィン衣装に身を包んだカオリが、背後からいつの間にか目の前まで移動している。

アカリとのえつちなフラッシュバックに夢中で、気づいてすらいなかった。

「あつ……あうつ……ご、ごめん……」

「いーよいーよ。なんか、調子悪そうだねー？」

私で良かったら相談にのるよー？」

「……………そ、それは……………」

言いづらい。そもそも、最初はレベルドレイン対策の特訓をしようと思っていた。

レベルドレインを使える敵と当たったときのために。

しかし、今は――

「んー。話してくれないと少し寂しいさー。」

カオリの顔がやや曇る。いつもの元気な彼女を知っているから、その表情は見ていて辛かった。

「君と私の間には隠し事とか、なーんにもないって思ってたさー…。」

でもそれは私だけだったのかなー…？」

うつすらと涙を浮かべながら、カオリ。それを見ると、話さずには

いられなかった。

いかに情けない相談事だったとしても…。

「……………じ、実は……………」

アカリちゃんがレベルドレインを覚えたこと、特訓でレベルを絞り尽くされたこと、そして二回目にも挑んだときにはもつと簡単に負けてしまい、さらにはそれを望んでしまう自分がいたことを騎士くんはカオリに話した。

カオリは、涙ぐんでいた表情から一転して明るい顔になっていたが、話が進むに連れ、顔を真っ赤にしていた。

「…ごめん。こんなこと相談しない方がいいと思っただけど…。」

踵を返し、立ち去ろうとする騎士くん。しかし—

「ま、待って—！」

顔を真赤にしながらも、騎士くんの手をぎゅつと握るカオリ。

「こ、この辺にも夜にはあんまし人が来ない公園があるよ。」

そ、そこにいくさ—。」

ギョツと握りしめたまま、カオリは騎士くんを連れて行った。

「き、君はえつちに耐性をつければいいさ—！」

わ、わたしのおっぱいで包んであげるから、それで、がんばるさ—

！」

言つて、カオリは騎士くんのおちんちんをなでなでと擦ってきた。

「あう…っ！…そんなの…！」

「と、友達が苦しんでるときは助けてあげるのが本当の友達さ—。」

わひゃあっ!？」

騎士くんのおちんちんを外に出すと、ぴよこんっ！

と元気に顔を出した。大きく、固く、そそり立つそれに、カオリは驚き、赤面していた。

「だ、大丈夫。大丈夫だよ。ちよ、ちよっぴり驚いただけさ—。」

言いつつ、彼女はパイスラッシュュしているハロウィンかぼちやのバッグを椅子におろす。

「君はここに座ってればいいよ。で、特訓したらいいさー。」  
「…とつくん?」

「こう、するさ…。」

カオリは、ぎっくり胸元を強調するハロウィン衣装のまま、おっぱいをおちんちんに触れさせる。

「あう…っ…!!!」

「ゆ、ゆっくり…ゆっくりだよ…。そう、いい子だねー…。」

そのまま、ハリのあるカオリのおっぱいの感触が、おちんちんを包み込んだ。

「うん。よく頑張ったさー。えらいよー。」

言葉は明るく、でも顔はうぶな少女のそれ。しかし、可愛らしい彼女の内面とは裏腹に、彼女のそれは大人の女性を凌ぐほどにたわわに実っていた。

「な、なんか、思ってたよりかわいいねー。胸のなかでぴくんぴくんっとしてるさー。」

「あう…カオリ…っ…!」

思わず腰をゆさゆさと揺らそうとする騎士くん。

「だ、ダメさっ!」

むぎゆううううううっ!と腰に抱きつかれてしまう。

「あっ…あっあう…!」

おっぱいの柔らかさに全方位を埋められてしまうが、さらなる刺激は絶対に得られない生殺し状態。それが騎士くんを苦しめた。

「こ、こうやって、胸に慣れていく特訓だよー。おちんちんぴゅくぴゅくさせ無ければいいんだよー。」

「あうあうあうううっ…!」

カオリのおっぱいに入れただけでいきそうだったおちんちんもだんだんと落ち着いていく。

「そう…そうだよー。えらいねー。おちんちん、だんだん震えなくなってきたさー。」

「はあっ…はあっ…はあっ…!」

「うん。君もよく頑張ったねー。えらいよー。」

につこりとカオリ。だんだんと慣れてきたのか、彼女の顔が赤面していないとは言えないまでも、まっかつかからは少し落ち着いていた。

「このまま、このままだよ？がんばるさー。」

「あう…あううう………。」

騎士くんの心は完全に折れてしまっていた。

カオリの身体能力は凄まじく、腰に抱きつかれたら離すことなんてできない。

このまま生殺しておちんちんを大きくさせられてしまう。

そして、精液を溜め込んだおちんちんを限界まで絞り尽くされてしまう。

「じゃ、じゃあ、少しだけこすこすしてくねー？無理だったら言っ  
ねー？」

言っ、カオリはおっぱいを少しだけ、動かした。

「っっっー！！！！」

「あつ、と。」

いきそうになったおちんちんへのぱいずりを止めるカオリ

「っっっ！！」

騎士くんは涙目になりながら、カオリを見つめた。

「ただだよー？もう少しだけ頑張ってみるさー。」

「うううっ………！！」

騎士くんの頭はすでにピンクの靄がかかり、何もまともには考えられなかった。

考えられることは、射精の快樂、ただそれだけだった。

「もう、限界？」

こくこくっ！と頷く騎士くん。

「わ、わかったさー。じゃあ、一度いかせてあげるねー。」

ゆっくりと、多少のぎこちなさもあいまって、少しもどかしい快樂が、騎士くんのおちんちんを包み込む。

「あつ…あつ…あつ…！！」

公園のベンチにもたれつつ、力のはいらなのまま、射精へと近づい

ていく。

「むにゅむにゅ…やさしく、してあげるねー？」

「あっ…あっ…あっ…!!」

とびゅっ！っと、カオリの胸の中で騎士くんのおちんちんがはじける。

すると、カオリは一段と力を抑えて、緩やかで優しいパイズリに変えてくれる。

「あう…あう…き、きもち、い…。」

幸福感に包まれたやさしいパイズリ。しかしー

「ふふっ、それは、よかったさー。でも、きみのおちんちんは、まだ固いままだねー？」

「!!」

『はむっ♪ちゅうちゅうちゅうちゅうちゅうちゅう♪』

『んあっううううあああああああああああっあああああああ  
あ』

『お兄ちゃんごめんね？アカリ、お兄ちゃんのがとっても美味しくて  
がまんできないよお♪』

アカリの壮絶なパイズリ責めが脳裏に蘇ってしまふ。

「ああっーら、らめえ！それ以上はー」

「うん。君がそう言うなら、無理にはしないさー。」

「え……………？」

「き、聞いたことあるさー。おちんちん、連続でいくのつらいんだよねー？」

だ、だから、優しくしてあげるから、だんだん胸にーううん、おっぱいに慣れていくといいんだよー。

君はとっても頑張りやだから、きつと克服できるよー♪」

言つて、彼女はおっぱいを優しく、優しく動かしてくれる。

気持ちよさは途切れず、苦しさは一切ない。甘くて優しいぱいずり。

騎士くんは、心の底から、安心して彼女に身を委ねた。

しばらく、幸福感に包まれたままのぱいずりが続く。

「んーっ？もう一回？いいいよー。優しくしてあげるねー？」

こくん、と騎士くんはママに甘える幼子のように、カオリの言うことを聞いていた。

「あっ…きもち…いいい…♪」

「ふふっ、それはよかったさー♪こうやって何度もすれば、きつとぱいずりの弱点も克服できるよー♪」

「うん…。 あっあっ…きもち、いい……………で、でるう……………♪」

「いいよー♪ゆっくり、気持ちよく出そうねー♪」

「はうう……………」

とぴゆん、と少しだけ騎士くんのおちんちんから精液が出た。

今日はもう、これ以上は出せないと思えた。

「ふふっ、たくさん出したねー。おっぱいべとべとさー。」

「ぐ、ごめん…」

柔らかな幸福感から、彼女に無理をさせてしまったという事に騎士くんは罪悪感を覚えた。しかし。

「大丈夫だよー。そ、それよりも、君がおっぱいに弱いのは慣れるしかないさー。」

だ、だから、何度も特訓してあげるよー。み、皆には内緒にして、頑張ろうねー？」

にこり、とはにかんだ笑顔のカオリ。

その無邪気な笑顔はまるで天使のようだった。

しかし、おっぱいを濡らす大量の精液が、より彼女を淫靡的に見せていた。

むくむく。と、騎士くんはまたおちんちんが大きくなってしまっていた。

「あはは、もう少し、してほしいんだねー？」

柔らかにカオリが笑う。それに、こくん、と頷いて騎士くんは返すのだった。

その後も、二人共幸せであまあまに、何度も何度もぱいずり特訓をくりかえした。

そうして、カオリのおかげで、騎士くんのえっちへの耐性はちよつぴりだけ上がった。

「どうして、シズルさんはあのお方が他の女と仲良くしているこの状況を看過できるのですか？」

やばい目の光を湛えて、彼女が囁く。その声は怨嗟の怒りに満ちている。

二人は、騎士くんとカオルの秘密の逢瀬を何度か見てしまっていたのだった。

エリコは何度も止めようとしたが、そのたびにシズルによって制されていったのだ。

「ん？エリコちゃん分からない？ふふっー」

対して、余裕の笑みを浮かべつつ、もう一人が囁く。

「この前の夏休み、弟くんはたくさんさんの女の子と一緒にいて大人になっただけでいいですよ？」

「それは、そう、ですが…。」

「それと一緒にだよ♪弟くんはいろんな娘とえっちして立派な大人になっただけでいいの。」

「で、ですが、それでいいんですか？」

「いいの♪だってー」

笑顔には変わらないのに、恐ろしい威圧感のような何かをエリコは感じるようになっていた。

「だって、私が弟くんの最高のパートナーだって、証明したらいいだも



ん。

とつても、簡単でしょ？」

人差し指でむにゆり、と自身のおっぱいを突きながら、シズルが返す。

ぞくり、と戦慄する。

しかし——あの方を巡っての戦いだけは負けられない。負けるわけにはいかない。

「くすくす。シズルさんには悪いですが、あの方を一番気持ちよくして差し上げられるのは、私ですので、お忘れなきよう。」

笑顔の二人。傍から見ればそれは微笑ましくも見えたのかもしれない。

しかし彼女らの内面は、彼女らにしか分からないのだった。